

日本交通心理学会および日本交通心理士会の発表用原稿の書き方

○苗字名前¹・苗字名前²

(¹所属機関正式名称・²所属機関正式名称)

Key words: キーワード, キーワード, キーワード

このファイルについて

このファイルは、日本交通心理学会ならびに日本交通心理士会が主催する年次大会や地区別研究会などの抄録に掲載される各種発表用原稿(以下、抄録原稿)の雛形として作成されたものである。このファイルを雛形として抄録原稿を作成すれば、余白、段組み、行間、フォントサイズなど体裁の調整は不要である。また、このファイルの本文に原稿作成時の留意点を記載したので、発表用原稿の作成にあたって、抄録原稿の著者(以下、単に「著者」とする)はこのファイルを一読してから執筆にとりかかっていたいただきたい。

なお、留意点の多くは、日本心理学会の「執筆・投稿の手引き」(<https://psych.or.jp/manual/>)を参照するかたちで記載した。心理学系の日本の学会の多くがこれに準拠した論文フォーマットを採用しており、日本交通心理学会の抄録原稿もこれに倣うこととした。

一方で「執筆・投稿の手引き」は、論文誌「心理学研究」に投稿する著者のために作成されたものであり、抄録原稿のフォーマットとしては制約が厳しすぎる部分や、抄録原稿の事情に合っていない部分がある。したがって、このファイルには「執筆・投稿の手引き」と抄録原稿でフォーマットが異なる点を中心に記した。著者は「執筆・投稿の手引き」も一読の上、ここに記載がない内容については「執筆・投稿の手引き」の記載にしたがって原稿を作成していただきたい。

日本交通心理学会ならびに日本交通心理士会では、他の心理学系の学会に比べて、論文執筆に慣れていない著者が多数いると推察される。そこでこのファイルの後半では、研究者にとっては当たり前で「執筆・投稿の手引き」に記載されていない内容についても、いくつか解説を加える。

「執筆・投稿の手引き」第3章との相違点

ここでは、「執筆・投稿の手引き」の第3章(<https://psych.or.jp/manual/manual05>)に記載された論文フォーマットに関する内容と、抄録原稿との相違点を記す。ここに記載がないことは「執筆・投稿の手引き」の第3章にしたがって論文を作成していただきたい。

このファイルの記載を優先すべき内容

ここには、「執筆・投稿の手引き」に記載があったとしても、このファイルの記載を優先していただきたい内容を記載する。

論文の長さ 抄録原稿の長さはA4用紙で2ページまたは4ページとする(1ページと3ページは認めない)。

余白 「執筆・投稿の手引き」では用紙の余白を上下左右3cm以上としているが、抄録原稿はページ数が限られているため、余白は上下左右2cm以上とする。このファイルの余白は上下左右2cmである。

段組み キーワードまでは1段組み中央揃え、本文は2段組み両端揃えとする。副題は「執筆・投稿の手引き」でもなるべく用いないよう求められているが、用いる場合にはタイトルの下に1行挿入し、タイトルより小さいフォントで記載する。

行数と字数 行数と字数は任意とするが、極端に広がったり詰まったりして読みにくくならないように留意してほしい。このファイルは42行/ページ、22文字/2段組み片側である。

ページ番号 事務局で通しのページ番号を入れるため、著者はページ番号を記載しない。

二ヶ国語表記 タイトル、著者名、著者所属について、「執筆・投稿の手引き」では二ヶ国語表記を求めているが、抄録原稿ではタイトルは日本語のみ、著者名と著者所属は原語(例:日本人名は

日本語)での表記のみとする。

著者名と所属の対応 著者も所属機関も複数である場合には、著者の右肩に数字を付し、所属の左肩に対応する数字を付す。単著の場合や、著者が複数であっても所属が1つの場合には数字を付す必要はない。また、所属機関が複数あり、そのうち1つの所属機関に2人以上の著者が所属している場合には、共通した数字を用いる。なお、著者の順序は研究への貢献度順とし、発表予定者の前には「○」を付す。

アブストラクト 「執筆・投稿の手引き」では、英文アブストラクトを記載するよう求めているが、抄録原稿では英文、和文ともアブストラクトは記載しない。

フォント 「執筆・投稿の手引き」では見出しのフォントをゴシック・ボールド(太字)とする指定があるが、抄録原稿ではゴシックにするだけでよい(ボールドにしない)。見出し以外の日本語にはすべて明朝体フォントを用いる。半角英数字には、英文専用フォントを用いることが望ましい。タイトルは原則14ポイント、著者名以降は統一サイズで原則10.5ポイントとする。ただし、引用文献リストにはこれより小さいフォントを用いて差し支えない。

図表の配置 「執筆・投稿の手引き」では、図表を末尾に別紙で添付するよう求めているが、抄録原稿では本文での図表の説明の直後など、本文中の適切な位置に配置する。可能であれば、表はページの上端、図はページの下端に配置する。図表内の文字が縦長・横長になることを防ぐため、図表を本文に貼り付けたあとに縦横比を変えてはならない。

なお、図表のタイトル位置や図表の色、罫線、軸や単位など、図表のフォーマットは多岐に渡る。

「執筆・投稿の手引き」の該当箇所(表はhttps://psych.or.jp/manual/manual05#3_7、図はhttps://psych.or.jp/manual/manual05#3_8)には詳細な解説と適切な図表の見本が掲載されているので、よく確認した上で作成すること。

「執筆・投稿の手引き」準拠を免除する内容

ここには、可能なら「執筆・投稿の手引き」に

従うべきだが、難易度が高いなどの理由から、必ずしも準拠を求めない(無理に従わなくて良い)内容を記載する。

表題ページの脚注 表題ページの脚注に記載する内容のうち、所属変更と改姓に関する情報、責任著者の連絡先は省略できる。また、利益相反に関する情報は本文中の記載とすることができる。

図表の言語 「投稿原稿の作り方」では、図表を英語で作成するよう求めているが、抄録原稿では日本語で作成して構わない。ただし、同じ論文内では図表の言語を統一することとし、日本語と英語の図表の混在は認めない。

改行のルール 中央大見出しのあとは原則1行空きとするが、どうしても入り切らない場合などは中央大見出しのあとの空行を省略できる。なお、省略有無は論文内で統一すること。

その他

「執筆・投稿の手引き」の第3章には論文フォーマットに関して細かいルールが詳細に記載されている。特に、見出し(「執筆・投稿の手引き」の3.3.1、以下同じ)、句読法(3.3.4)、カタカナ・略語(3.3.6)、統計記号(3.4.3)、引用・言及(3.6)、表(3.7)、図(3.8)、文献リスト(3.9)、キーワード(3.10.2)については、間違った書き方が散見されているので必ずチェックしてほしい。特に、引用・言及、表、図、文献リストについては、それぞれ「執筆・投稿の手引き」の中で多くのページを割いて細かいルールや具体例が示されている。これらを熟読するとともに、わからない場合には、自己流で書かずに、都度「執筆・投稿の手引き」を参照していただきたい。

これまで日本交通心理学会が公開してきた雛形には、日本交通心理学会の過去の抄録原稿を参考にする旨の記載もあるが、過去の抄録原稿にはフォーマットが不適切なものも散見される。したがって、これらは参考にせずに、今後はこのファイルに書かれた内容と「執筆・投稿の手引き」を参照するか、査読を経て掲載された「交通心理学研究」等の論文を参考に原稿を作成すること。

なお、「執筆・投稿の手引き」には付録3として「心理学研究」投稿のためのチェックリスト」

(<https://psych.or.jp/manual/manual09>) も公開されているので、こちらも併せて活用し、提出前にフォーマットや体裁に不備がないか最終確認していただきたい。

フォーマット以外に関すること

文章と構成

文章と構成については「執筆・投稿の手引き」第1章(<https://psych.or.jp/manual/manual03>)が参考になる。

適切なタイトル 論文のタイトルは内容を端的かつ過不足なく表現するものでなければならない。あたりまえのことなので、末尾に「に関する研究」などを付ける必要はない。ただし、後述のエントリー時のタイトルとの一致を優先させること。

「である調」の使用 論文は「ですます調」ではなく、「である調」を基本とする。

用語の統一 同一の対象や概念などを表す用語は論文内で一貫して同じ用語を用いなければならない。外国語、略称、一般的でない用語は初出の箇所ですら正式名称や説明を示し、定義する必要がある。

主観的表現の回避 論文では主観的表現を避ける必要がある。例えば「私が釣った魚は大きかった」という表現は大きさに対する著者の主観を含んでおり、著者と読者のミスコミュニケーションの原因となる。したがって「魚は40cmであった」とか「他の人が釣った魚の平均値の2倍の重さであった」など、客観的な表現を用いる必要がある。

構成のバリエーションと内容 構成は「執筆・投稿の手引き」でも「各部分を含むことが望ましい」という表現に留められているとおり、あまり厳密でなくてよい。例えば論文冒頭は「問題」のほか、「はじめに」や「背景と目的」など様々なバリエーションがあるが、著者が書きやすいもので構わない。また、エビデンスベースの事例研究などでは、さらに自由な構成としても差し支えない。

いずれの場合も、冒頭部分では過去の研究を十分引用し、これまで明らかになっていること、いないことを明確にする必要がある。また、単に事故統計などを引用し、「交通事故が多いから研究を

する」などの大雑把な展開は避けるべきである。事故統計を引用する場合には、少なくとも問題としている事故類型と、行おうとしている研究の関係性などを述べるべきである。

研究背景にあたる部分と「目的」は分けてもよいし分けなくてもよいが、研究目的は明確でなければならない。これ以降の方法、結果、考察などはことごとく研究目的に照らして読まれ、評価されることに留意する必要がある。

「方法」は再現性（別の研究者が同じ手続きで検証ができること）を担保するように過不足ない内容を書く必要がある。

「結果」には客観的な事実を書き、著者の解釈は「考察」に書く。「結果と考察」のようにまとめて書くこともできるが、この場合も客観的事実と著者の考えを混同しないようにする。

「まとめ」や「結論」にはその研究で行った手続きと結果が端的にわかる内容を書くが、抄録原稿程度の短い論文では省略して差し支えない。

「謝辞」は必要があれば記載する。

「文献」は本文中に登場したもののみを著者・作成者の苗字のアルファベット順に記載し、単に「参考」にしたものや統計の教科書などは記載しない。

倫理的配慮

研究倫理の要件や範囲の解釈は、分野や研究者によって若干の幅があるが、少なくとも、盗用、捏造、剽窃(ひょうせつ)、研究費の不正利用など、いわゆる研究不正を行わないこと、適切なオーサーシップ(発表者名と研究に貢献した人が一致していること)を守ることなどは、共通して求められる研究倫理として浸透している。

また、心理学はヒトを対象とした研究であることから、研究参加者(被験者)の権利に対する十分な配慮が必要である。具体的には研究参加者は十分に説明を受けた上で、自由意志により参加を決めることができ、不参加や途中辞退による不利益を被らない措置が求められる。また、研究者は研究参加者のリスクを最低限にするための配慮や、研究参加者のプライバシーを守るための配慮をしなければならない。

